五高工学部・熊本高工土木工学科における卒業生の就業状況に関する人物史的研究*

Study on history of civil engineers about currents of graduates from The Fifth High School and Kumamoto Higher Technical School

山中孝文**・田中尚人***・星野裕司****・小林一郎*****

By Takafumi YAMANAKA, Naoto TANAKA, Yuji HOSHINO and Ichiro KOBAYASHI

概要

熊本大学工学部の前身である第五高等学校工学部、のちの熊本高等工業学校は、1897（明治 30）年、1906（明治 39）年に実業専門学校として設立された。ここでは高等専門学を教授し、卒業生は工学得業士の称号が授与された。本研究では、卒業生を対象に彼らの就業状況を人物史の視点から分析する。土木学会デジタルアーカイブスに掲載された資料やその他の文献を基礎資料とし、卒業生自身が記述した文章を抽出した。これにより、当時の状況に近いデータをもとにした具体的な分析が可能だと考えている。

1．はじめに

日本の近代化を支えた土木技術者教育機関は、明治中期以降、黎明期を迎え、全国に学校が設立された。その中でも高等専門学を教授する土木技術者教育機関には、「工学士」を輩出した大学と「工学得業士」を輩出した実業専門学校の２種類があった。熊本には、現在の熊本大学工学部の前身である、第五高等学校工学部（以下、五高工学部と省略）のちの熊本高等工業学校（以下、熊本高工と省略）が設立された。そこでは、五高工学部設立時の 1897（明治30）年から工学得業士を授与する土木技術者教育が行われた。

筆者らは、先行研究として土木史研究講演集[1) 2) 3) 4)]および土木史研究論文集[5)]で、五高工学部・熊本高工での土木技術者教育や卒業設計、卒業生の動向といった視点から、その意義について考察した。参考文献５）では、卒業生の動向については概観を明らかにしたのだが、個人の経歴や実務の内容といった就業状況には及んでいない。実業専門学校や工学得業士に関する研究としては、札幌農学校[6)]や土木分野の工学得業士[7)]に関して原口らが研究した。また、文献にも実業専門学校についての記述[8) 9)]が少しあるのみである。そこで、筆者らの一連の研究を通して、具体的な例から工学得業士に関して分析することで、土木技術者教育の源流といえる時期の教育内容や土木技術者としての動向、さらに官公庁や企業といった組織内での技術者構成、工学士と工学得業士の位置づけの違い等を示せると考えている。

本研究では実業専門学校である五高工学部・熊本高工の土木工学科卒業生を対象に、具体的な就業状況の一端を明らかにする。ただし、本稿では現状の調査から判明したこと、その課題および今後の視点についてまとめる。

*Keywords：人物史、実業専門学校、工学得業士、就業状況

**学生員　修（工）　熊本大学大学院自然科学研究科 博士後期課程
（〒860-8555　熊本市黒髪２丁目 39 番１号）
***正会員　博（工）　熊本大学政策創造研究教育センター 准教授
****正会員　博（工）　熊本大学大学院自然科学研究科 准教授
*****正会員　工博　熊本大学大学院自然科学研究科 教授

2．文献における工学得業士の整理

一般的にまとめられている、土木技術者としての工学得業士の位置づけを把握する。そのために、各種文献をもとに工学得業士について、①設置時、②制度上、③就業時、の各位置づけから整理する。

（１）工学得業士設置の経緯

全国各地で近代化が進むにつれ、土木技術者の需要が高まったものの、供給数は不足していた。帝国大学工科大学のみでは十分に補充できず、また高額の報酬を払ってお雇い外国人を増やすことも難しかったことが理由である。そのため、高等な知識を持った日本人土木技術者を早期育成し、安定的に大量供給する必要があった。

図－１は、1908（明治41）年の学校系統図である。中学校卒業後、大学予科を経ずに実業専門学校（３ヶ年）へ進むため、卒業時には大学の卒業生より３年早く社会へ供給された。図－２には、土木工学を修めた工学士と工学得業士の人数変遷を示す。図より工学得業士を輩出した実業専門学校が増加した 1908（明治41）年頃から、総数も増えている。その後の工学士の人数があまり変化していないことからも、工学得業士の増加が総数の底上げに役立ったといえる。

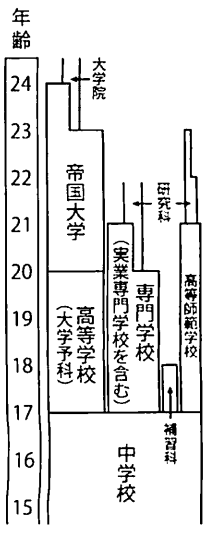
工学得業士の称号は、1947（昭和22）年４月１日の学校教育法施行により、廃止された。

（２）法規・学制上の記載

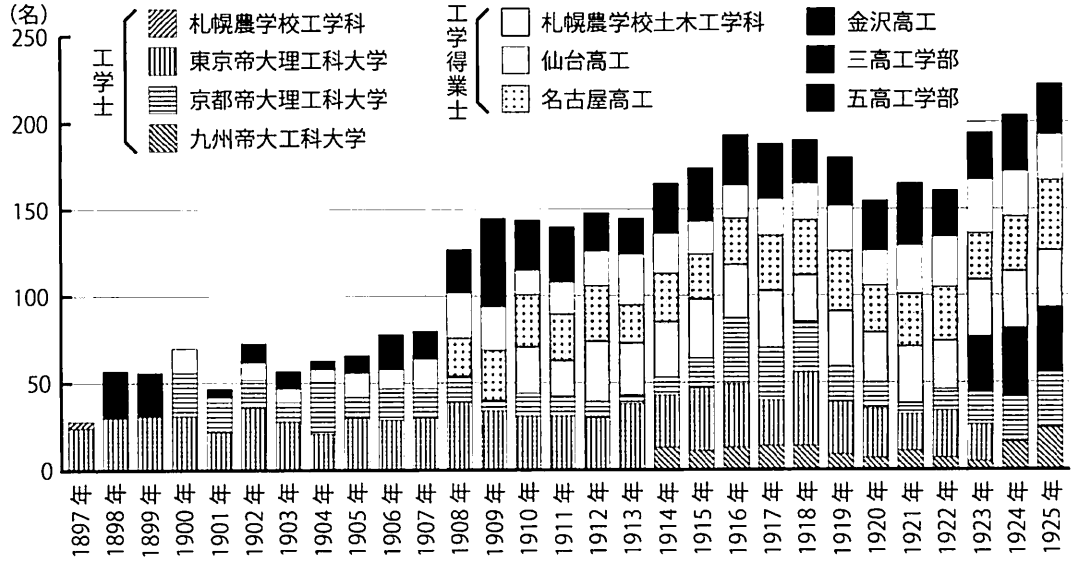
制度上の位置づけを把握するために、教育法規と学制上での記載内容を整理する。表－１には、施行年、教育法規、学則、記載内容をまとめた。

①教育法規

高等学校令案の検討段階で「高等学校学士」や「得業士」の記述はあったが、公布時には盛り込まれず、その他の教育法規に関しても実業専門学校に工学得業士を与えるといった文言は盛り込まれなかった。教育法規上では、得業士は大学で及第した者か、高等学校卒業後に進学し、専攻科を修了した者に与えられる称号だった。



図－１　1908 年の学校系統図



図－２　土木工学を修めた工学士・工学得業士の人数変遷

表－１　教育法規と学則上での工学得業士の記載内容（網掛け部は学則）

年	教育法規	学則	内容
1872（明治5）	学制		「学位の称号を分ちて、博士・学士・得業士とした。中学教科を卒業して大学に入り、一箇年修業の後及第したる者には、*得業士*の称号を与へ」
1879（明治12）	教育令		記述なし
1894（明治27）	高等学校令		高等学校令案の検討段階で「高等学校学士」や「得業士」の記述はあったが、公布正文には記述されなかった。
1897（明治30）		第五高等学校規則　総則	「醫學部及工學部卒業生ハ其修了したる學科ニ随ヒ*何學得業士*ト稱スルコトヲ得」
1899（明治32）	実業学校令		記述なし
1903（明治36）	専門学校令		記述なし
1906（明治39）		熊本高等工業学校規則　総則	「本校ノ卒業者ハ*工學得業士*ト稱スルコトヲ得」
1918（大正7）	高等学校令		「専攻科を卒りたる者は*得業士*と称する」

②学則

五高工学部・熊本高工の学校一覧[10) 11)]によると、学則には設立時から工学得業士を授与すると書かれていた。

つまり、①と②より、工学得業士を実業専門学校の卒業生に与えると教育法規上は記載されておらず、五高工学部・熊本高工の学則にのみ記載されていたことが分かる。

（３）就業状況に関する記述の抽出

土木分野に限らず、工学系の実業専門学校卒業生について、その就業状況に関する記載を文献から抽出し、一般的な事実を整理する。

①昇進について

「内務技師の採用標準＝學士でなければ技師に任用しない[12)]」

②初任給について

「どの企業でも大学卒と専門学校卒との初任給格差がみられた。明治末から大正初頭では、平均して帝大卒 100 に対して実業専門学校卒は 60 という格差があったが、昭和に入ると縮小し、理工系では、大卒 100 に対して専門学校卒約 83%、法商文系では、大卒 100 に対して専門学校卒 85%となった。[13)]」

③就業の傾向について

「大学卒が、どちらかというと管理的業績で勝負していくのと比較して、実業専門学校卒は技能的業績で勝負していく傾向があった。[13)]」

以上より、一般的に役割や待遇において、大学と実業専門学校の卒業生間には明確な差があったといえる。

３．個人史にもとづく就業状況の整理

一般的には２章のような状況だった工学得業士の実情を把握するために、五高工学部・熊本高工の卒業生に関する文献内の記述をもとに、①需要と供給、②関係した土木事業、③土木事業内での役割の３点から就業状況を整理する。

（１）需要と供給の一例

ａ）実社会からの需要

表－２は、需要に関する記述をまとめたものである。表より、需要は全ての申込みに応えることができないほど多く、さらには卒業前の勤務を望む場合もあったことが分かる。

ｂ）進路の決定方法

表－３は、進路および転職に関する記述である。表より、各自の進路は教員の紹介や勧めによって決定された例が見られた。

（２）調査資料の詳細

個人史の一端が読み解ける資料として参考にした、土木学会デジタルアーカイブスに掲載されている明治以降の土木関連誌（①～④）と、その他の文献（⑤）について説明する。①～④に関しては、全記事で筆者の氏名が、数篇の記事で筆者の所属が記載されている。

表－２　需要に関する記述内容の一覧

年	報告状況	内容	文献名
1901（明治34）	五高工学部第一回卒業式 学事報告	既ニ之ガ採用ヲ申込ミタル官廳會社の數ハ遙ニ卒業生ノ員數ニ超過シ、悉ク供給シ能ハザルヲ遺憾トス。	熊本高等工業学校沿革史
1906（明治39）	熊本高工第一回卒業式 学事報告	土木工學科ノ如キハ卒業スベキ現在數二十名ニ對シ三十二名ノ雇傭申込アリテ	熊本高等工業学校沿革史
1910（明治43）	熊本高工卒業式 学事報告	土木科ノ如キハ需用供給ニ超過シ申込ニ應スル能ハサルモノ六名ナリ。	熊本高等工業学校沿革史
1938（昭和13）	熊本高工 熊本工業會報　第44号	概ね第1学期までに大多數の就職交渉は内定濟	熊本大学工学部百年史
		卒業までは待ち切れぬとあつてなるべく早目に赴任願いたいと多くの諸會社、殊に豫算關係でどうかと心配されたる官衙方面だつてやつぱり1月に來て欲しいとの註文（中略）卒業式には都合をつけて出席出來るやうに手配をしたいとか、又たそれまでの期間は待遇手當の方法も考慮中だの、中には又た全然卒業同等の待遇でと大に奮發した心意氣を見せてゐるところもある。	熊本大学工学部百年史

表－３　進路決定方法に関する記述内容の一覧

卒業年	氏名	内容	文献名
1901（明治34）	池神重政	卒業後の就職先きはと申せば凡て學校で取決めて戴いて	熊本高等工業学校沿革史
1909（明治42）	米川敬治	（※同年、採鉱冶金学科卒業の關必による回顧） 私の親友舊工學部土木科仝年卒業生に今尚ほ東京藤林組に活動して居る（元宮崎縣土木課技師として宮崎縣土木事業に盡し恩給を受け名技師とうたはれ惜まれて退職後も亦三浦先生の御世話で東京市役所技師となり現職にあり）米川敬治	熊本高等工業学校沿革史
1928（昭和3）	川辺利夫	遠藤科長の厳しいすゝめで大林組に入社した。	熊本大学工学部創立八十周年記念集録
1930（昭和5）	森田定市	石炭王国三井鉱山に恩師の紹介で就職することができた。	熊本大学工学部創立八十周年記念集録
1935（昭和10）	野田勝美	3年生の2学期も終りの頃、電気工学の授業中に先生から呼出しがあって、「君は九州送電ちう会社に行かんか」「私九州送電という会社は聞いたこともありませんが何んな会社でしょうか」「電気会社たい、あそこにや山本君（明治44年卒先生と同級）が居るけんよかばい、もうそこに決めとけ」といわれてから卒業式まで約5ヶ月、面接もなければ採用通知は勿論のこと何一つ会社から連絡がありませんでした。 帰郷して2日目先生から「3月15日九州送電に出社せよ」という電報をいただきまして、福岡の同社に出社して始めて山本大先輩にお目にかゝりました。面接試験があるものと勝手に想像していました処、その日に採用辞令を貰うという次第で、徳弘先生と山本さんの絶対的なお互の信頼感には全く敬服の至りでした。	熊本大学工学部創立八十周年記念集録

①土木学会誌

土木学会の発行する学会誌で、第１巻（大正４年２月）～第45巻（昭和35年12月）の分が全巻掲載されている。

②工学会誌

土木学会の前身である工学会（現、日本工学会）の発行した学会誌で、第１巻（明治14年11月）～第452巻（大正10年10月）の分が全巻掲載されている。

③土木建築工事画報

工事画報社の発行した月刊誌で、建築・土木の施工記録を中心に多数の写真と図面で編纂された。第１巻（大正14年２月）～第16巻（昭和15年９月）の分が全巻掲載されている。

④道路の改良

道路改良会の発行した雑誌で、第１巻（大正９年11月）～第26巻（昭和19年６月）の分が全巻掲載されている。

⑤その他の文献

例えば、『神戸市水道七十年史[14]』、『近代水道百人[15]』、『熊本大学工学部創立80周年記念集録[16]』、『土木人物辞典[17]』、『肥後　熊本の土木[18]』には、詳細な個人史が掲載されており、携わった土木事業やそこでの役割、または異動することになった経緯のような情報を知ることができる。

表－4　卒業生の報告した土木事業一覧（網掛け部は他校の卒業生）

資料名	巻数	号数	発行 年	発行 月	筆者	勤務先	記事タイトル	対象地	工事期間
土木学会誌	11	6	1925（大正14）	12	田崎修	東洋アルミナム株式会社	黒部橋架設工事報告	富山県	大正12年1月～大正13年9月
	15	5	1929（昭和4）	5	松浦康秋	-	高松港鉄筋混凝土浮桟橋工事	香川県	大正14年12月1日～昭和2年度
	16	8	1930（昭和5）	8	（関場茂樹） 浅井郁爾 江田良治	奈良電気鉄道株式会社 奈良電気鉄道株式会社 奈良電気鉄道株式会社	淀川橋梁工事報告概要	京都府伏見市宇治川	昭和3年4月8日～同年10月30日
	18	1	1932（昭和7）	1	岩尾新	-	白鬚橋工事報告	東京市隅田川	昭和3年9月～昭和6年6月
	18	6	1932（昭和7）	6	植村倉蔵	-	神戸市水道上ヶ原緩速濾過池集水渠	兵庫県神戸市	-
	19	5	1933（昭和8）	5	藤原琢而	-	仁淀川発電所工事報告	高知県	昭和6年5月12日～昭和8年3月15日
	19	5	1933（昭和8）	5	松田健作	-	地盤軟弱なる大阪港に於ける繋船岸壁及び防波堤工事の特種工法に就て	大阪府	-
	20	8	1934（昭和9）	8	吉田弥七	熊本高等工業学校 教授	水源としての地下水の利用に関する実地研究	-	明治43年～大正14年3月
	20	4	1934（昭和9）	4	坂本一平	-	宇島港修築工事概要	福岡県	昭和7年度～昭和10年度
	22	6・7	1936（昭和11）	7	後藤茂	大井川電力株式会社 土木課長	大井川発電工事報告	静岡県	明治40年～昭和6年12月1日
	23	3	1937（昭和12）	3	林為蔵 緒方惟明	梓川電力株式会社 土木課長 梓川電力株式会社 土木課	犀川筋梓川電力沢渡発電所工事概要	長野県	昭和10年11月12日～昭和11年11月末
	25	10	1939（昭和14）	10	（森忠蔵） 山口義彦	日本発送電株式会社三浦事務所 日本発送電株式会社三浦事務所	三浦貯水池堰堤工事に就て	長野県王瀧川	昭和11年10月～昭和17年予定
	35	2	1950（昭和25）	2	川上謙太郎	宮崎県工業専門学校 教授	台湾阿公店渓の洪水調節貯水池の水理計算	台湾	-
	35	3	1950（昭和25）	3	川上謙太郎	宮崎県工業専門学校 教授	跳水路の水理的設計について	-	昭和17年3月～昭和24年5月末
	37	6	1952（昭和27）	6	森田定市	三井鉱山株式会社三池鉱業所 建設部長	三池炭鉱に於ける人工島工事について	福岡県、熊本県	昭和24年11月21日～昭和26年8月中旬
	41	6	1956（昭和31）	6	石田親信 松尾喜治	三井石油化学 三井鉱山	S.J.方式による三池港貯炭場改良工事	福岡県、熊本県	昭和27年5月～昭和29年6月
	44	3	1959（昭和34）	3	小椋正	松島炭鉱KK大島鉱業所技術部 土建課長	松島炭田開発にともなう池島における人工港築造について	長崎県西彼杵半島	昭和23年？～昭和33年6月末
土木建築工事画報	5	7	1929（昭和4）	7	松田健作	大阪市役所港湾部 技術課長	橋台のない大阪築港の日和橋	大阪市築港運河	大正14年4月～同年11月中断～昭和3年1月再開～同年4年3
	8	1	1932（昭和7）	1	野方寅吉	朝鮮総督府内務局清津土木出張所 所長	清津港修築工事に就て（1）	清津府	大正11年～大正13年工事中止～昭和元年度再開～昭和8年度予定
	8	6	1932（昭和7）	7	相良守	京浜電気鉄道株式会社 技師	京浜電鉄横浜乗入線建設工事概要	神奈川県	大正14年～昭和6年12月
	8	8	1932（昭和7）	8	山田一	宮崎県土木課 課長	宮崎県橋橋改築工事概要	宮崎市大淀川	昭和5年3月24日～昭和7年3月
	9	1	1933（昭和8）	1	藤原琢而	高知県電気局 技師	仁淀川発電所工事大要	高知県仁淀川	昭和6年5月～昭和8年3月予定
	9	2	1933（昭和8）	2	林為蔵	帝都電鉄株式会社 工事課	着々進工し開通間際にある郊外鉄道渋谷吉祥寺線	東京府	-
	10	1	1934（昭和9）	1	与田喜知蔵	大阪府土木部 工営課長	神崎川改良工事概要	大阪市－尼ヶ崎市	昭和7年度～昭和8年度
	12	1	1936（昭和11）	1	後藤茂	大井川電力株式会社	宮崎県橋橋改築工事概要	静岡県大井川	昭和9年4月～昭和11年9月予
	12	7	1936（昭和11）	7	清田清次郎 （栗津義隆）	東京高速鉄道株式会社第一出張所 所長 東京高速鉄道株式会社第一出張所	東京高速鉄道建設工事	芝区新橋～渋谷区大和田町	昭和10年9月～同12年末
	13	1	1937（昭和12）	1	寺田甫	島根県土木課 課長	松江大橋架設工事	松江市	昭和9年度～昭和11年度
	15	1	1939（昭和14）	1	山本格	九州送電株式会社	塚原堰堤工事（1）	宮崎県耳川	-
	15	4	1939（昭和14）	4	奥平次郎	大分県土木課	小松橋架換工事	大分県駅館川	昭和12年1月～昭和14年1月
道路の改良	7	3	1925（大正14）	3	川勝忍	静岡県技師	伊豆東海岸府縣道震災復舊工事に就て	静岡県熱海小田原線・伊東熱海線	大正12年10月1日～大正13年12月末
	9	10	1927（昭和2）	10	山本廣一	兵庫県技師	神明國道福田橋架設工事の概	兵庫県福田川	-
	10	8	1928（昭和3）	8	坂本一平	福岡県土木課長	主基斎田と道路	福岡県	昭和3年3月～5月31日
	13	4	1931（昭和6）	4	有元岩鶴	-	吾妻橋改築工事概要	東京都大川	設計：大正13年10月～昭和4年3月、工事：昭和4年6月17日～昭和5年12月20日）
	14	3	1932（昭和7）	3	坂本一平	福岡県	瀬高橋復舊工事概要	福岡県矢部川	昭和5年3月10日～昭和6年6月

（3）工事報告の抽出

まず、（2）①～④の資料から、卒業生の氏名で掲載された記事を抽出したところ、それぞれ①67件、②0件、③16件、④100件の合計183件が見つかった。表－4には、その中から土木事業に関する報告のみ34件を一覧にした。灰色にした氏名は、他校の卒業生である。これらの資料から、事業自体の詳細や卒業生が大きく関係した可能性があることはわかるのだが、関係した土木技術者の氏名や各人の担当といった、人に関する情報はほぼ分からない。

不明点について調査する手段としては、各事業に関する報告書を当たることが考えられる。

（4）就業状況に関する記述内容の抽出

表－5には、（3）で抽出した183件から、卒業生の具体的な就業状況に関する記述を示した。また、表－6には、（2）⑤の資料をもとに詳細な経歴のわかる卒業生をまとめた。

これらの表から、卒業生の携わった土木事業と、その中での役割について一例が整理され、工事の主任技術者や熊本市上下水道の設計等の役割が伺えた。

表－5　就業状況に関する記述内容の一覧

資料名	巻数	号数	発行 年	発行 月	筆者	勤務先	記事タイトル	記述内容
土木学会誌	11	6	1925（大正14）	12	田崎修	東洋アルミナム株式会社	黒部橋架設工事報告	本橋梁の計畫及實施に際して常に指導の任に當られたる先進山田胖氏、*現場關係者として林爲藏、岩尾新*、小倉兼友三氏の不斷の盡力に對して衷心感謝に堪へず、併せて謝意を表する次第である。
	17	6	1931（昭和6）	6	吉田彌七		水源としての地下水の利用に就て	大正9年7月より同12月に亘って著者は本會々員現横濱市水道局堀江勝己氏が當時熊本市水道局長たりし頃その依囑により*熊本市水道水源たる八景之水谷水源井の設計實驗に從事*した。
	18	1	1932（昭和7）	1	岩尾新		白鬚橋工事報告	隅田川白鬚橋は東京都市計畫事業として東京府之れを企圖し、昭和3年9月起工、同6年6月竣工、工事は上部構造及び下部工事共一式大林組の請負に拘り、*著者は之れが主任技術者として終始之れに携はりたるもの*にして、本編に於ては同工事中特に施工方法に就き詳述し、併せて之れに對する著者の意見を述べしものなり。
	18	6	1932（昭和7）	6	植村倉藏		神戸市水道上ヶ原緩速濾過池集水渠	當時著者は故博士の下に*上ヶ原工營所主任として施工に從事*し傍ら御懇篤なるご指導を仰いで本計算に當つたのである。
	19	5	1933（昭和8）	5	藤原琢而		仁淀川発電所工事報告	7. 計畫設計者　*水路工作物計畫設計主任技師　藤原琢而*
	20	8	1934（昭和9）	8	吉田彌七	熊本高等工業学校教授	水源としての地下水の利用に関する実地研究	本計畫は*著者が大正9年熊本市長の依囑により熊本市臨時水道調査課長工學士堀江勝己の下に於て設計せるもの*で、施工は主として熊本市技師左座小一郎氏が當られた。 熊本市上水道は最初市長辛島格氏これを提唱し、明治43年初めてこれが*調査を熊本高等工業學校に委囑*した。依つて同校川口校長、小溝・遠藤兩教授等研究の結果市外八景水谷の源泉を水源として、これをその儘立田山に揚水し此處に配水池を設ける案を立てた。
道路の改良	14	12	1932（昭和7）	12	中末郁二		砂利道の交通量と砂利撒布量との關係に就て	私は本年五月に埼玉縣廳に勤める様になつたのであるが、夫れまではずつと*山梨縣廳に居て道路の維持に關する事務をやつて居た*。其の間に山梨縣に於いて砂利道に於ける交通量と砂利撒布量との關係に於て調査して居た
	16	9	1934（昭和9）	9	池本泰兒		道路景観	私は突然六月十五日に内務省下關土木出張所勤務を命ぜられた。そして下關土木出張所では*佐世保市の國道工事と長崎市の國道工事とを擔當*する様になつたのである。

4．おわりに

現時点での調査・整理からのまとめとその課題、今後の視点について述べる。

（1）まとめ

①工学得業士は土木技術者の量的拡大というニーズから設けられた。ただし、その称号は教育法規上には記載されておらず、五高工学部・熊本高工の学則にのみ記載されていた。

②実社会からの需要は応えられないほど多く、進路決定の一例として教員の紹介が見られた。

③具体的な就業状況として、携わった土木事業やその中での役割について一例が示された。

（2）課題

①工学得業士は全高等工業学校に与えられたのか、また、一般的に認知された称号だったのか。各学校の学則を調べたところ、工学得業士を与えることについて、第三高等学校工学部では見つかったが、仙台高等工業学校や名古屋高等工業学校といった設立時から高等工業学校の場合、記載されていなかった。

②需要は“工学得業士として”求められたものか。

③学位や称号によって、就業状況に差があったのか。それとも、経験を積むほど、差はなくなったのか。

（3）今後の視点

職員録や事業報告書といった具体的な技術者構成や役割のわかる資料から分析を進める。

参考文献

1）田中尚人・星野裕司・本田泰寛・小林一郎：創立期の五高・熊本高等工業学校における技術者教育に関する研究，土木史研究講演集，Vol.27，pp.297-300，2007

2）山中孝文・田中尚人・本田泰寛・星野裕司：五高・熊本高等工業学校における土木技術者教育に関する研究，土木史研究講演集，Vol.28，pp.1-6，2008

3）山中孝文・田中尚人・星野裕司・本田泰寛：土木分野における工学得業士に関する研究―五高工学部・熊本高工の卒業生を対象として―，土木史研究講演集，Vol.30，pp.319-330，2010

4）蓮尾信彰・山中孝文・星野裕司・小林一郎：熊本高工の卒業設計における道路橋設計の分析，土木史研究講演集，Vol.30，pp.331-338，2010

5）山中孝文・田中尚人・本田泰寛・星野裕司：五高工学部・熊本高等工業学校における土木技術者教育に関する研究，土木史研究論文集，Vol.28，pp.151-158，2009

6）例えば、原口征人，今尚之，佐藤馨一：札幌農学校の土木工学教育に関する研究，土木史研究 審査付論文，第18号，pp.17-28，1998

7）原口征人，日野智，今尚之，佐藤馨一：旧制官立専門学校における中級土木技術者教育，土木史研究 審査付論文，第20号，pp.15-22，2000

8）天野郁夫：『大学の誕生（上）』，中公新書，2009.09.30

9）天野郁夫：『大学の誕生（下）』，中公新書，2009.06.25

10）第五高等学校：『第五高等學校一覧　自明治三十二年　至明治三十三年』，1900.12.10

11）熊本高等工業学校：『熊本高等工業學校一覧　自明治四十一年　至明治四十二年』，1910.2.23

12）社団法人 道路改良會：『道路の改良』，第14巻 第7号，1932.7

13）麻生誠：『日本の学歴エリート』，玉川大学出版部，p.290，1991.9.1

14）神戸市水道局：『神戸市水道七十年史』，1973

15）近代水道百人選考委員会：『近代水道百人』，1988.10

16）熊本大学工学部創立80周年記念事業会：『熊本大学工学部創立80周年記念集録』，pp.114-115，1978.7.28

17）藤井肇男：『土木人物事典』，2004.12.10

18）園田頼孝：『肥後　熊本の土木』，1983.4.1

表－６　文献に掲載された卒業生の詳細な経歴

卒業年	氏名	卒業後の経歴			付帯情報	文献名
		始	終	勤務先		
1907（明治40）	植村倉藏	1907年7月	1912年	大蔵省臨時建築部神戸支部		神戸市水道七十年史
		1912年12月	1919年3月15日	神戸市技手、のちに技師、その後、用済解職	第1回水道拡張工事（佐野藤次郎部長の下で工営所主任を務める）	
			1921年1月	大分市水道技師		
		1921年5月	1923年4月	甲府市水道技師		
		1923年4月		神戸市技師	第2回水道拡張工事（第一線で活躍）	
		1936年11月		阪神上水道市町村組合の設計調査主任技師	淀川引水事業第1期工事	
		1941年		神戸市嘱託		
1915（大正4）	安部源三郎	1915年3月		朝鮮総督府官房土木局		近代水道百人
		1917年	1920年	三井田川炭鉱第三坑		
		1921年		若松市技師　水道課長		
		1925年		長岡市　上水道課長		
		1927年		前橋市　工務課長		
		1934年		岐阜市　水道課長	第1,2期上水道事業（日本最初の分流式下水道の完成）	
		1942年	1947年春	岐阜市　水道部長		
		1949年		安部工業所設立	PC水道タンクのパイオニア	
1916（大正5）	上床義隆	1916年4月		朝鮮平安南道庁土木課	水利潅漑事業、特に畑地の水田化 江西郡内舞鶴山を源とする川に築く遊亀堤の測量・設計・現場監理	熊本大学工学部創立八十周年集録
		1918年1月		大阪府　本庁	災害復旧、普通土木工事（1906年五高工学部卒業の与田喜知藏技師の下で）	
		1920年11月		大阪府　岸和田土木出張所　所長	坂井市内の道路、橋梁、河川の維持・改良等	
		1922年8月		大阪府　本庁	十大放射路線改修計画の一端	
		昭和初期	1946年3月		大阪府営水道の基礎調査・予算策定 大阪市営地下鉄初期の梅田難波間や阪急、南海等各社における当初の高架線設計審査	
1921（大正10）	園田頼孝	1921年4月	同年暮れ	鉄道省　神戸改良事務所		肥後　熊本の土木
		1922年	1923年3月	熊本県	天草瀬戸橋（設計・工費積算、現場担当）	
		1923年4月		熊本高工助教授	担当科目：測量、図学等	
		1931年		熊本高工教授	担当科目：施工法等	
		1949年		熊本大学助教授		
		1950年	1966年	熊本大学教授		
1922（大正11）	池本泰兒	1922年		内務省土木局第一技術課　技手		土木人物辞典
		1931年		内務省土木局国道改良係　技師	例外的に学士でないが、内務技師となるものの、反発にあう	
		1941年		アフガニスタン土木顧問		
		帰国後		豊川、鳴海、鈴鹿等の工事所務所長		
		1946年	1950年	愛媛県土木部　土木部長		
		1950年		愛媛県監査委員		